東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

我が国におけるスヌーズレン研究の動向と課題：研究分野によるスヌーズレンに対する認識の差について

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2021-04-01
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 橋本, 敦子, 加瀬, 進
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/166806

東京学芸大学紀要　総合教育科学系　72: 177 – 190，2021.

我が国におけるスヌーズレン研究の動向と課題

―― 研究分野によるスヌーズレンに対する認識の差について ――

橋　本　敦　子*1・加　瀬　　進*2

特別ニーズ教育分野

（2020年9月29日受理）

1．はじめに

スヌーズレンとは，SNUFFELEN（クンクンあたりを探索する様子）DOEZELEN（うとうと気持ちのいい様子）この2つのオランダ語を掛け合わせた造語で，1970年代初頭のオランダで，重度知的障害者のWell-beingを目的として始まった余暇活動である。重度知的障害者は，感覚器に直接訴える刺激を通じて外の世界を探索しているという見解から，光・音・香り・振動・触覚の素材等，感覚器を直接刺激するものを豊富に備えた環境設定を用意し，利用者が自ら好む感覚を楽しむというコンセプトのもと始まった。

スヌーズレンは，ヨーロッパで障害者のケアとしてアロマセラピー・タッチングケア・音楽療法等の温かなケアが注目され始めるようになった1980年代，それらを一つにまとめようという動きの中で発展し，Ad VerheulとJan Hulseggeが1986年に発表した著書「SNOEZELEN EEN ANDERE WERELD（英題：Snoezelen Another World）によって世界中に広まるようになった。重度知的障害者のための余暇活動的な位置付けとして始まったスヌーズレンだが，昨今はセラピーとしても活用され，現在は世界45カ国以上に広がっている。（Ad Verheul，2017）[44]」

スヌーズレンの世界的な研究組織である，ISNA（International Snoezelen Association）[45] によると，スヌーズレンの構成要素は，1）利用者2）介助者3）感覚刺激が豊富な環境，この3つである。また，世界的に見ると，スヌーズレンの同義語として，「MSE」（Multi Sensory Envirornment）＝多重感覚環境，以下「MSE」と表記）という名称が使われることもある。

日本におけるスヌーズレンは，姉崎（2011）[8] によれば1993年に東京の島田療育センターで始められたことに端を発する。

スヌーズレンは，1999年に設立された（島田療育センターホームのページによれば職員の手作りによる活動を1980年代後半から始めたとされる）日本スヌーズレン協会により長く余暇活動として認識されてきたが，今日では児童発達支援センター・放課後等デイサービス・小児病院の他，特別支援学校，認知症高齢者施設等にも普及しはじめている。

このような現状を踏まえて姉崎（2013）[7] は，2012年までの諸外国におけるスヌーズレンの先行研究を整理しつつ，学校における教育活動のスヌーズレンとして「スヌーズレン教育」という新しい教育の概念を提案している。また，わが国におけるスヌーズレンの概念は，1）余暇活動的位置付けである，2）セラピーや教育的な位置付けにも活用できる活動である，という2つの見解に大きく分かれており，概念が一致されていないことを指摘している。

諸外国では治療や教育の分野に応用されているスヌーズレンは日本でもその発展が期待されるものの，我が国においては学術研究が非常に少ないのが現状である。そこで，本稿ではスヌーズレンに関する研究レビューを行うこととした。国内におけるスヌーズレン研究の動向と課題の検討は姉崎（2013）が行っているため，本稿ではまず，姉崎らの研究レビューを概観したうえで，① 2012 年までのスヌーズレンに関する研究の動向と課題②2012年以降のスヌーズレンに関す

＊1　東京学芸大学大学院修士課程 教育支援協働実践開発専攻 教育協働研究プログラム
＊2　東京学芸大学 特別支援科学講座 特別ニーズ教育分野（184-8501　東京都小金井市貫井北町 4-1-1）

る研究の動向と課題の大きく２つについて整理・検討することとしたい。

２．方法

2019年７月31日に国立情報学研究所のNII論文情報ナビゲーター（CiNii）を用いて①2012年６月までのスヌーズレンに関する文献，②2012年以降のスヌーズレンに関する文献の２段階に分けて検索を行った。まず①のスヌーズレンに関する文献の検索では，姉崎（2013）と同様に論題名に「スヌーズレン」が含まれている文献を検索した。その結果41件が対象となった。次に②2012年６月以降のスヌーズレンに関する文献も同様に論題名に「スヌーズレン」が含まれている文献を検索した。その結果72本が対象となった。また，これらの論文に加えて，スヌーズレンに関する国内の書籍についても参考にした。

３．2012年までの我が国におけるスヌーズレンの概念に関する研究の動向と課題

姉崎（2013）は，（以下，姉崎と表記）2012年６月１日までに執筆された国内外の学術書・研究論文を対象としてスヌーズレンの研究動向を分析し，歴史と語源，わが国における導入，教育的効果と他の感覚教育法等との関連による位置付け，わが国の学校現場におけるスヌーズレン教育の導入の意義と教育過程上の位置付け，導入上の課題と限界について概観している。ここではまず，姉崎による研究レビューを概観しておきたい。

なお，姉崎（2013）で引用されている先行研究の出典情報は本論文では割愛した（通し番号の付されていない文献を指す）。

３．１　スヌーズレンの歴史，概念とわが国における導入

スヌーズレンは，1970年代中頃オランダの知的障害者施設ハルテンベルクセンターで，重度知的障害者のための余暇活動として始められた。知的障害者自身がさまざまな感覚刺激を体験することで，レクリエーション活動として楽しむだけではなく，個々のもつ感覚の地図を発達させることの重要性は当時すでに指摘されていた。（Cleland & Clark，1966）。

スヌーズレンの環境設定において代表的なものはリラックスを主な目的としたホワイトルームであるが，この空間は壁や天井，床が全て白で統一され，余計な視覚刺激が抑えられている。できる限り遮光された空間で，スヌーズレンの機器を使った光刺激，リラックスを促す音楽などを使用した聴覚刺激，アロマによる嗅覚刺激などを通じて複数の感覚を刺激する。その他の空間も同様に対象者の様々な感覚を刺激し，そばにいる教員などは，対象児の自発的な活動を見守り，本人の気持ちに共感して必要に応じて声かけやスキンシップを行う。

スヌーズレンの語源は，オランダ語の「スヌッフェレン」（Snuffelen,「クンクンにおいを嗅ぐ」という意味）と，ドゥーズレン（Doezelen,「ウトウト居眠りをする」という意味）の２つの言葉からなる造語である。つまり，スヌーズレンには，「まわりの環境に働きかける側面」と「リラックスする側面」の二面性がある。1980年代以降，スヌーズレンはオランダから世界へと広がっていき，今日ではスヌーズレンと同じような意味で，“Multi-SensoryEnvironment”（MSE: 多重感覚環境）という用語が英国や米国等で使用されている（Mount & Cavet，1995; Pagliano，1997; Slevin & McClelland，1999）。

姉崎によれば，ドイツではスヌーズレンは障害児者だけではなく健常児者にも広く活用されており，その有用性が社会的に広く認められてきているという。また，2002年にはドイツのフンボルト大学でスヌーズレンの理解・啓発と研究の推進を目的にInternational Snoezelen Association（国際スヌーズレン協会，以下ISNAと表記）が設立され，今日に至っている。

３．２　わが国におけるスヌーズレン導入と課題

わが国におけるスヌーズレンに関する最初の報告は（鈴木，1992 山中，1990）オランダ・ハルテンベルクセンターの海外研修報告である。その後，日本にスヌーズレンを普及する日本スヌーズレン協会（以下，協会と表記）が1999年に設立され，その普及が行われきた。昨今では，重症心身障害児施設を中心に，知的障害者施設や肢体不自由特別支援学校でもスヌーズレンを導入する施設が増えてきている。しかしながら，同協会がスヌーズレンのリラクゼーションの側面を強調し，「スヌーズレンの効果を評価することは困難である」と明言していることが学校現場でのスヌーズレン導入について混乱を招いていると，姉崎は指摘している。このような状況から，姉崎（2003）やAnezaki（2004）は重度・重複障害児の自立活動として授業にスヌーズレンの取り組みを報告していることに触れ，作業療法士の野村（2011）が同様にスヌーズレンのセラピーとしての理解や推進を提唱しているこ

とについても述べながら，わが国におけるスヌーズレンの概念は見解が分かれ統一されていないことを指摘している。

３．３　スヌーズレンの概念の検討

諸外国のスヌーズレンの概念の変遷を概観すると，1990年代前半から2000年代前半までは，創始者の説と同様にスヌーズレンは余暇活動であるとみなす研究報告が主流である。しかし，1990年代後半に入ると，Gallaher and Balson（1994），Mount and Cavet（1995）Pagliano（1997）らをはじめとしたスヌーズレンを教育活動としてみなした実践研究報告，さらに2000年代に入ると，Slevin and McClelland（1999），Baillon，Diepen and Prettyman（2002）等，スヌーズレンをセラピー活動とみなす研究報告が医療現場で多数なされるようになり，教育やセラピーとしての見方が多数みられるようになった。

こうした報告例を挙げながら，姉崎はISNAによると，国際的にスヌーズレンは余暇活動・教育・セラピーとして認められていると述べており，ISNAの見解を踏まえてスヌーズレンを以下のように定義している。「スヌーズレンとは，対象者のニーズに応じて，視覚，聴覚，触覚，嗅覚，味覚などを適度に刺激する，人工的な多重感覚環境を部屋や教室などに創出し，対象者と介助者（または指導者）と環境の三者間の相互作用により，対象者の主体性や相互の共感を重視して，対象者の余暇活動を促したり，障害などの改善や回復・克服を目指したり，さらに心身の発達を促し支援する活動である」。

３．４　スヌーズレンの教育的効果と他の感覚教育法等との関係による位置づけ

Mertens（2003）や姉崎（2012）によれば，スヌーズレンでは概念操作の能力をあまり必要としないと推測されることから，「子どもの脳内の文字・言語面や算数・数学面，あるいは運動面の領域などに障害があっても，視覚や聴覚，嗅覚，触覚，味覚などに関係する大脳辺縁系の部位がおもに活性化することから，重度知的障害児や重度・重複障害児であっても，スヌーズレン活動を楽しむことができると考えられる」としている。姉崎（2012）は，「教育」とは教師が一方的に教材や教具を用いて教え込むことだけでなく，児童の自発的な行動を待って関わることで様々な能力が引き出され高められることを述べた上で，教育活動としてのスヌーズレンを「スヌーズレン教育」と命名し，以下のように定義づけている。

「スヌーズレン教育とは，教室内を暗幕などでうす暗くし，対象児の好む光や音（音楽），香りなどの感覚刺激を用いた多重感覚環境を教室内に設定して，その中で感覚刺激を媒介として教師と対象児および対象児同士が相互に共感し合い，心地よさや幸福感をもたらすことで，対象児のもつ教育的ニーズ（発達課題）のある感覚面や情緒面，運動面，コミュニケーション面などにおける心身の発達を促し支援する教育活動である」。

ここで姉崎は，自身が命名した「スヌーズレン教育」と，他の代表的な感覚教育法との違いを概観するために，モンテッソーリ教育・感覚統合療法との相違点を比較している。3つの感覚教育法の共通点としては，子どもの自発性を重視し，教具（器材）や遊具を用いて感覚を刺激して脳の活性化を図り，子どもの発達を促したり治療を行ったりする点を挙げている。一方，相違点として，①モンテッソーリ教育や感覚統合療法は子どもの目前の教具や遊具で一つずつ学習していくのに対して，スヌーズレンは複数の教具（器材）が同時に創出する多重感覚環境の中で学習を行うこと，②モンテッソーリ教育や感覚統合療法は主に触覚や固有受容覚などを刺激するのに対し，スヌーズレン教育は，おもに視覚・聴覚・嗅覚・味覚といった大脳辺縁系を中心に刺激し，活性化させること，③スヌーズレン教育は，子どもが好む感覚刺激を用いて自発的な活動を引き出すだけではなく，特にリラクゼーションを促し心理的な安定を図る点で，他の感覚教育法などに比して際立った特徴を有していること，としている。そうしたことからも，スヌーズレン教育は，反応のきわめて乏しい重症児にとっても無理なく学習に取り組める教育法であり，重症化が進む特別支援学校に必要な教育法のひとつである，と述べている。

３．５　わが国におけるスヌーズレン教育の導入の意義と教育過程上の位置付け

姉崎は，重度・重複障害児へのスヌーズレン教育導入の意義として，以下５つの項目を挙げている。

①未発達な感覚面の初期教育に寄与すると考えられることから，特に寝たきりの重症児の発達ニーズにも応えられる教育であること，②対象児に幸福感をもたらすことで学習活動を一層楽しいものにし，興味・関心の拡大や自発的な運動・動作などを引き出すこと，③自らの働きかけが乏しい重度障害児に対し，主としてスヌーズレンの諸刺激や環境（教師の存在と関わりも含む）が対象児に働きかけ，リラクゼーションや自発的な活動を促進すること，④感覚器官を活用して周

りの刺激や環境を，時間をかけて十分に楽しむことで自己表現の力を引き出す感覚遊びの側面を有しながら，感覚刺激を媒介として子どもと教師間および子ども同士の人間関係の形成やコミュニケーションの促進にも寄与する学習活動であること，⑤精選され統制された人工的な多重感覚環境の中で子どものわずかな反応をじっくりと観察することができることから，特に対象児を見る教師の目を養うのに効果的であり，教師の専門性向上に寄与すること。

上述より姉崎は，スヌーズレン教育は，今日の重度・重複障害（重症）児の実態や発達ニーズに応えられる優れた教育方法のひとつであるということができると指摘し，スヌーズレンの授業は，教育課程上おもに自立活動と特別活動（学校行事やクラブ活動）の授業に位置づけられると考えられるが，知的障害教育代替の類型では，遊び学習や生活単元学習に位置づけることも可能であるとしている。

３．６　導入上の課題と限界について

このように，学校におけるスヌーズレン導入の意義が述べられているが，導入上の課題として以下５つの点を挙げている。

①校内の限られた教室数の中で，スヌーズレンの授業を実施できる大がかりな器材などが入る専用の教室を確保することが難しい場合が考えられること，②スヌーズレンの器材は，一般的に輸入品で高価なものが多く，学校の限られた予算内で購入することが困難な場合が考えられるため，国内で同様の効果のある比較的安価な器材を見つけて安全に使用できるように設置したり，教師がオリジナルな器材を開発したりすることなどが必要であること，③一般にスヌーズレンの授業は集団で行う場合が多いと考えられるが，実際には対象児と担当教師との個別的な関わりが多くなりやすく，他の教師や子どもたちとの関わりが希薄になりやすいと考えられること，④スヌーズレンの創出する環境は人工的な異空間であり，教室環境との間に大きな隔たりがあるため，スヌーズレンの授業で子どもが学習し獲得した力が他の場面に転移・般化されにくいと考えられること，⑤スヌーズレンの教具（器材）の使用方法とその効果，スヌーズレンの授業の展開や評価方法などに関する研修機会が不足していること。

また，姉崎は，姉崎（2012）が定義する「スヌーズレン教育」の限界として，以下２つ述べている。

①重度・重複障害児の中には，スヌーズレン環境の創出する光刺激などによりてんかん発作を誘発することがあるため，授業参加が困難になる場合があり，子どもの実態に応じた感覚刺激の種類や量の調整など，環境設定においてきめ細かな配慮が必要であること，②スヌーズレンの授業では，大脳辺縁系を中心におもに視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚を同時に活性化させるが，子どもの発達を促す面は限定されること。

こうしたスヌーズレン教育の限界について理解し，学校生活や他の授業での指導計画を作成する必要があるとしている。

４．2012年以降のスヌーズレンに関する研究と我が国の動向と課題

姉崎（2013）は，2012年６月までの研究レビューでわが国におけるスヌーズレンの概念は見解が分かれ統一されていないことを指摘している。姉崎の研究レビュー以降，国内では２本の研究動向に関する論文が見られたが，海外におけるレビューが中心であった。よって，2019年７月31日に国立情報科学研究所のNII論文情報ナビゲーター（CiNii）を用いてスヌーズレンに関する文献の検索を行い，その研究動向を概観し，スヌーズレンの概念や見解の前提について整理することとした。検索をかけた68本のうち，スヌーズレンに関する論文は64本であった。それらを概観し大別すると，①文献研究，②思想研究，③調査研究，④実験研究，⑤実践研究・報告，⑥その他（機器製作や紹介・スヌーズレンの紹介，海外施設・研究者講座・視察報告，提言など）に分類することができる。以下では，それぞれの分野におけるスヌーズレン研究の現状を整理することとしたい。

４．１　スヌーズレンの文献研究

柳本（2016）[43] は，欧米，アジア等諸外国におけるスヌーズレンに関する学術的レベルの研究について，関係文献に基づきその現状と課題を分析している。日本におけるスヌーズレンについては姉崎（2013）と同様，余暇活動として導入されてから現在まで進展していないとし，実践報告レベルのものが多数を占め，外国の研究と比較して質・量ともに限られていると言及している。創始者の一人，Ad Verheulは，スヌーズレンは非指示的な活動であり，治療や教育を中心とした機能にしたくないとしつつも，全面的にそれを排斥したわけはないと主張している点も姉崎と共通している。そして最後には，スヌーズレンを余暇活動（リラクゼーション）だけでなく，治療や教育と捉えることを基本としつつ，創始者の構想を尊重して，あまり効果重視の価値観に偏することのない実践及び研究を推

進することの大切さを銘記すべきだと結んでいる。

小原ら（2015）[13] は，姉崎（2012）が定義した「スヌーズレン教育」について，沖縄県の肢体不自由特別支援学校における実践報告を収集し，その定義と教育課程の位置づけに基づいて整理・分析を行うことで課題を明らかにしている。その結果，（1）注意力向上，（2）保有する感覚の活用促進，（3）リラックスや情動の安定，（4）感情の表出，といったスヌーズレン教育の実践成果や，（1）スヌーズレンの環境整備，（2）環境整備のための予算と教室確保，（3）教材研究の推進，（4）評価基準・評価方法の確立，といったスヌーズレン教育の課題があることが明らかになったとしている。

スヌーズレンを臨床的に応用した事例について研究を行なっているのは，大野呂ら（2017）[12] である。大野呂らは，世界的に見るとこれまでに「対象別の効果の内容」「効果の持続・般化」に関するものが多く報告されていることに触れている。しかし，対象別に見れば知的障害者や認知症を対象としたスヌーズレンの効果については様々な症状が改善したという報告があるものの，知的障害のない発達障害者とスヌーズレンとの関連性を調査したものは非常に少ないことに触れ，発達障害を対象としたスヌーズレンの研究動向について報告している。その中で大野呂らは，スヌーズレンは発達障害の二次的障害にもリラクセーション効果を通じて好ましい影響が期待されるとしているが，一方で「スヌーズレンは，光，音，振動や匂いなどの多感覚環境を提供するものであり，ASDに併存する感覚過敏の状態によっては上記の多感覚環境を受け入れがたいものとして負の効果を及ぼすことも推測される」としている。

なお，本来スヌーズレンにおける環境は，利用者のニーズに合わせ，光の強弱，音，香りなどを提供する活動であり，感覚過敏の児童に対しては，外界の刺激をできるだけ遮断することが重要になってくるため，上記は誤認識と思われる。

認知症者の非薬物療法をテーマとし，認知症者へのスヌーズレンについて文献研究を行ったのは眞田ら（2018）[38] である。認知症患者に対するスヌーズレンは，攻撃的／挑戦的行動，興奮，徘徊，不適応行動などの行動や気分の改善に効果的であるという報告が多かったとするものの，スヌーズレンの活動と対照として行われたその他の活動に有意差が見られなかった事例や，対照的な活動がより有効であるとする報告があったことについて触れている。こうした現状からスヌーズレン導入により期待できる展望および機器導入にかかる費用対効果を踏まえて，臨床的な応用研究を検討することの必要性を論じている。

生理学的視点からスヌーズレンを捉え，スヌーズレンとワーキングメモリの関係性についてレビューしているのは桃井である。

桃井（2018）[42] は，様々な五感刺激がワーキングメモリに影響を与える先行研究を踏まえると，個別の嗜好に合わせたコントロールされたスヌーズレンの環境はワーキングメモリに対して影響を及ぼすことが期待できるとしている。また，ワーキングメモリが運動習慣などによって向上するとの指摘があることから，スヌーズレンを他の活動と併用することで相乗効果が生まれる可能性があることを述べている。

４．２　スヌーズレンの思想研究

姉崎（2015b）[5] によれば，日本では1990年代にスヌーズレンが導入され，日本スヌーズレン協会により「スヌーズレンは治療法でも教育法でもない」と広く啓発されてきた。しかし，スヌーズレンに関する最初の著書”Snozelen Another World”を分析すると，Ad Verheulら創始者は，「スヌーズレンはセラピーや教育にも自由に利用できる」と述べていることを指摘し，今後も他の論文資料などを用いた検討が必要であることを述べている。こうした主張は，姉崎（2013）柳本（2016）の他，複数の論文で見られた。

４．３　スヌーズレンの調査研究

2013年以降のスヌーズレンに関する調査研究は3件存在した。その内容を概観すると，（1）肢体不自由特別支援学校における重度・重複障害児のスヌーズレンの授業に関する全国調査研究（姉崎，2019）[2]，（2）スヌーズレンの環境調整に関する調査研究（姉崎・藤澤，2017）[4]，（3）韓国におけるスヌーズレンの取組みに関する聞き取り調査（姉崎，2015a）[6] である。全ての調査目標において共通することは，調査により日本におけるスヌーズレンのあり方について検討することであった。以下では，それぞれのアンケートについて概観する。

（1）「肢体不自由特別支援学校における重度・重複障害児のスヌーズレンの授業に関する全国調査研究」（姉崎，2019）では，肢体不自由特別支援学校（知肢併置を含む）を対象に，スヌーズレンの授業の現状と課題を明らかにすることを目的としている。

スヌーズレンの教育的効果について尋ねる内容を中心としたアンケートから，多くの教師が児童生徒のリラックスや注視等の主体的な行動を教育活動として評

価していることが示されている。その結果を受け，姉崎は現場の教師が日々のスヌーズレンの授業に確信が持てるよう，研修会の開催や授業モデルに関する学校現場での実践研究の必要性を訴えている。

（2）「スヌーズレンの環境調整に関する調査研究」（姉崎・藤沢，2017）では，姉崎らが所属するISNA日本スヌーズレン総合研究所主催第６回研修会参加者を対象にスヌーズレンルームの使用についてどうあるべきかを検討するアンケート調査を行なっている。スヌーズレンにおける物理的な環境設定は，利用者のニーズに応じた刺激を提供するために，光や音，環境等の外界刺激を調整する必要があるが，スヌーズレンの専用機器が導入された施設の教育関係者及び医療・福祉関係者の全員が，「ほとんど配置換えをしていない」（環境を調整していない）と回答したことを報告している。一方で，手作りのグッズ等で環境を創り上げた施設は配置換えをしている傾向が示されているのだという。姉崎らは，スヌーズレン専用の機器を導入し，環境をそのまま使用して実践を継続させる取り組みが強調されることは，安易な取り組みに陥る危険性が生じることが危惧されると，懸念を示している。

（3）「韓国におけるスヌーズレンの取組みに関する聞き取り調査」（姉崎，2015a）では，ほぼ日本と同時期にスヌーズレンが伝わった韓国でスヌーズレンの取り組みについて調査を行っている。同調査によれば，韓国では作業療法士がいち早くスヌーズレンをセラピーとして導入し，治療効果に関するエビデンスを多くあげ様々な効果を出したことから，国がセラピーとして認可しているのだという。現在，韓国でスヌーズレンは医療保険の対象であり，調査時点で４０名の国際資格取得者がおり，資格取得者でなければスヌーズレンルームに入ることも許されていない。姉崎は同論文でも上述（1）と同様に，障害児者や患者・家族などのニーズに応えられる，質の高いスヌーズレンの活動を提供するために資格セミナー構築の重要性を訴えている。

４．４　スヌーズレンの実験研究

スヌーズレンが重症児・者の自律神経機能と自発的行動に及ぼす影響について検討を行ったのは，北川ら（2013）[16]，北川（2014）[15] である。北川（2014）は，重症児・者の感覚刺激活動中の反応を心拍変動のHFとLF/HFを指標として用い，客観的に評価できることを示している。また，自発性が高まるスヌーズレン活動を行うことで重症児・者の主観的QOLが向上することを示した。しかし，単一対象者研究となったため事例数が少ないことから，事例数を増やしての検証が必要であることや，複数の機器を用いてより一般性の高い評価を行うことなどが必要であることを述べている。

スヌーズレン空間が自律神経活動を反映する心拍および心拍変動に影響を与えるか否かを検討したのは，坂野ら（2013）[22] である。坂野らは，発達障害児４名を対象に，スヌーズレンの空間が自律神経系活動を反映する心拍および心拍変動に影響を与えるか否かの検討を行なった。実験ではスヌーズレンの空間とプレイルームを比較して検討が行われたが，その結果，交感神経系活動はスヌーズレン空間内の方が低い傾向にあったものの，副交感神経においては優位な差が見られたかったと報告している。また，Takeda（2008）が重症心身障害児・者を対象にストレス軽減効果を心拍および唾液アミラーゼ活性値を用いた研究では値が減少しているという報告があったことを受け，同様の結果が得られなかったことについても述べている。しかし同時に，その背景にはサンプル数が少なかったことに加え，自力での活動が制限される重度心身障害者と発達障害児ではスヌーズレン空間での過ごし方で運動量の差があり，そうしたことが心拍変動に影響を受けている可能性もあることを指摘している。

スヌーズレン環境がどのような認知メカニズムで生体に影響を与えるのか探索的な検討をしたのは，橋本ら（2018）[33] である。同研究では，正常な聴力を有している大学生を対象に視覚odd-ballを用いて実験を行なっている。橋本らは，スヌーズレン環境における聴覚刺激は注意の定位という観点で重要な役割を果たしていることが予測される結果となったとしている。また，スヌーズレン環境では多感覚が刺激されることにより覚醒水準が適度に上昇し，外界への注意の配分が拡がるという適応的な状態が生じ，結果として生体に良い効果をもたらしている可能性が示唆されたと述べている。

親子スヌーズレン体験に参加した障害の有無にかかわらない成人を対象に，スヌーズレンにおけるリラクゼーション効果の検討を行ったのは，西木（2016）[29] である。同研究では，唾液アミラーゼ測定・質問用紙を使用して，MSEにおけるリラクゼーション効果を測定している。その結果，唾液アミラーゼ測定の平均値は体験前と体験後を比較すると低下しており，MSEは障害のない成人に対してリラクゼーション効果があることが示唆されたと述べられている。筆者は，これまでに親子を中心としたスヌーズレンルームを運営してきており，そこで同様の研究を行なったこ

とがあるが，同様の結果は得られなかった。西木の研究では，成人を対象としているが，一人で入室したのか，子どもと一緒に入室したのか，一緒に入室した子どもの年齢が何歳であったかといった詳細は明らかにされていない。そうした条件により反応は変わってくることも考えられるが，ここではさらなる検討課題としてとどめておきたい。

重症心身障害児のリハビリテーションセンターのプレイルームにスヌーズレンの環境を設定し，重度心身障害児とその母親にスヌーズレンを実施し，母親の心境変化に関する考察を行なったのは間島ら（2017）[37]である。間島らは，障害児を育てる親のストレスが測定できるQRS簡易版（稲浪他，1994）を用い，スヌーズレン施行前後の各尺度得点（0～10点）を測定し比較検討した。その結果，スヌーズレン施行前後で大きな差が見られなかったと報告しているが，それには対象としている児童は，通常ベッドサイドでの面会が主となっており，出生時からの母子分離や将来への不安，在宅療養かが出来ない心理的葛藤，同胞との絆・関係性等，長年抱えているストレスが強く関与しているものと推測されたとしている。

しかし，スヌーズレン施行後の母親へのアンケートでは「隣で寝ることへの幸福感」「児童の目の動き，空腹感などの小さな変化を感じた」という回答などがあり，母親の心境変化や家族機能の構築にも好影響を及ぼすことが示唆された，と述べている。

４．５　スヌーズレンの実践・研究報告

実践・研究報告は，介助者や教師の観察を通して児童の変化を報告するものが多くを占め，大半の対象児は重度知的障害児者・肢体不自由児者であった。そこで，まずは重度知的障害児者・肢体不自由児者を対象とした実践・研究報告について，年を追って概観する。

まず，木村は（2013）[19]今後のスヌーズレン教育の展開に参考となることを目的として，札幌市北翔養護学校におけるスヌーズレンの環境設定について課題や改善策について述べている。同校にはあぐら座位を想定した機器の設置などがあるものの，生徒の実態に応じた設備ではなかったことから，環境を検討することの重要性や，担当教員が変わっても生徒が混乱しないように分かりやすい教師からの声かけの工夫が必要だとしている。

加藤（2014）[14]は，通学困難な医療的ケアが必要な児童に対し，お湯で作ったベッドでリラックスすることを目的とした活動の報告をしている。自立活動６区分２６項目では個々に応じた取り組みが行われるが，ここにスヌーズレンの理念を生かすことができるとし，その可能性について述べた。

内藤（2014）[26]は，療育センターにおけるスヌーズレンを取り入れた療育の実践を報告している。様々な感覚の器材や玩具を使用することで，対象児の意識が外界へ向くようになり，手と目の協応性も高まったことを挙げ，児童の発達に合わせた課題を設定することの大切さを述べている。

後藤（2014）[21]は，重度・重複障害児の学習環境設置というのは大きな課題であるが，その一つの方法論としてスヌーズレンが効果的であること，感覚刺激の中でも特に香りが重度障害児とのコミュニケーションを深める上でとても有効であるとしている。

北畑（2014）[18]は，スヌーズレン実践において，個人に合わせた環境設定を行うことで，日常見られなかった笑顔や表情を見ることができた，と報告している。中にはスヌーズレンが向いていないと感じた児童がいたものの，その児童に合った環境が提供できていなかったのではないかと振り返っている。

奥田（2014）[9]は，生活介護事業所において，Krista Mertenseが考案したスヌーズレン評価法をもとに利用者の行動観察を行なった結果，笑顔や発語など，普段とは明らかに異なる変化が見られたことを報告している。

星川（2014）[36]は作業療法の観点から見たスヌーズレンについての解説と実践例報告している。星川は成人の重度知的障害者に対し，MSEの環境を調整して刺激を提供し観察を行ったことにより，普段の外界の環境が対象者にとってはいかに眩しくうるさいものであったかという気づきを得たという。また，MSEは対象者の感覚の偏り（得意や不得意）を見極めて，適切な感覚を提供することが可能だと述べている。

藤澤・姉崎（2016）[35]は，手作りのスヌーズレン環境を工夫することにより，スヌーズレンの授業実践の展開が十分に可能であるかどうかについて検討している。藤澤・姉崎によれば，対象児は左手をよく動かすようになったり，動く電飾を一定時間追視できるようになったり，授業者の声かけに表情良く応じることができたりと発達的な成長が見られたという。また，授業者と対象児の共感関係を築くことができれば手作りのスヌーズレン環境でも工夫次第で，効果的なスヌーズレンの授業実践が展開できることが示唆されたとしている。

北川（2016）[17]は，重度心身障害者施設において，一からスヌーズレン実施の計画・運営をどのように

行なっていたかについて報告している。何もかも一からのスタートであったが，スーパーバイザーの存在があったために，最終的には職員の誰もがスヌーズレンを実践できるようになったと報告している。

立和名ら（2018）[24] は児童の実態（仮想事例）に応じた，スヌーズレン模擬実践の報告をしている。スヌーズレンの現場実践者から「機器をどのように使って良いかわからない」「もっと効果的な使い方はないのか」という声があげられるとのことから，立和名らの模擬実践では，立和名がスヌーズレンを実施，他の参加者が児童役となる形で模擬実践を行ない，特性の違った児童を何パターンか想定した実践を行なった様子を動画で分析している。その結果，児童の特性を踏まえた実践の必要性およびスヌーズレン機器の使用法に関する知識の必要性があることを論じている。

長井ら（2018）[28] は知的障害児を対象に，簡易式スヌーズレンルームを活用した授業実践を行い，その実践がスヌーズレンとして成り立つかについて検証した。スヌーズレンに用いる器材は一般的に輸入品で高価なものが多いため，購入が困難な場合が多い。そこで，同様の効果がある比較的安価な器材を見つけ実践を行なった結果，簡易式スヌーズレンルームのような環境が整えばスヌーズレンの授業は十分に可能であることが示唆されたとしている。

豊見本（2018）[25] は，スヌーズレン教育の定義を踏まえた実践報告が少ないため，多くの教師がスヌーズレンについての理解を深め，教育的な指導法確立の一助となることを目的として実践報告をしている。肢体不自由児の学校でリラクゼーション効果を狙いとした環境設定をどのように行なったか，を中心に述べており，児童にとって授業者は柔軟に同調・共感できる重要なMSEの一部であることについても言及している。

教育的なスヌーズレンの具体的な授業案づくりに関する実践報告をあげているのは，藤澤ら（2018）[34] である。藤澤らは特別支援学校の自立活動の時間において，重度・重複障害児３名を対象に，見立てあそびの要素を取り入れた授業実践を行い，授業のねらいの評価について考察し，手作りスヌーズレン空間の有効性について言及している。

以上が重度知的障害児者・肢体不自由児者を対象とした実践・研究報告である。

次に，自閉症児を対象とした実践報告として，大仲ら（2013）[11]，中村（2014）[27] の２件について整理を行う。大仲ら（2013）は，日本ではおもに重度障害者や肢体不自由児を対象にスヌーズレンが行われてきているが自閉症児に実践された報告がほとんど見られないことに触れ，対象児がMSEにおいて，気持ちが満たされリラックスしたことで，楽しむことができた様子を報告している。また，中村（2014）は，言葉でコミュニケーションをとることのなかった対象児が，スヌーズレンを実践していく中でコミュニケーションが取れるようになったことを述べ，対象児童にとっては非常に有効な活動の一つになったとしている。

東ら（2018）[1] は通級による指導を受けている数名の児童を対象としたスヌーズレンの実践報告をしている。東は，14ヶ月間，通級指導の授業でスヌーズレンを実施し，児童に気持ちの変化や面白かったことを感想として書かせたものをまとめており，その結果，ほとんどの生徒が授業の前後において気持ちの変容を感じ，次回の授業への高い期待を持っていることが分かったとしている。また，「情緒の安定」や「コミュニケーションの向上」について，スヌーズレンは他の指導方法に比べて効果的であるように感じる，と東自身の感想を述べている。また，杉原ら（2018）[23] は，重度知的障害者の保護者のレスパイトケア目的にスヌーズレンを実践したアンケート報告をしている。その多くは肯定的な意見だったものの，一度に体験する人数と空間の関係からリラックスできなかった人もいたため，その点の改良が必要である，と課題をあげている。

４．６　その他のスヌーズレン研究（スヌーズレン機器・海外視察報告等）

その他のスヌーズレン研究としては，「スヌーズレン機器」に関するものとして，野村（2013,[32] 2014,[31] 2016,[30]）による既存のスヌーズレン機器紹介，嶺（2018a,[41] 2018b[40]）などによるスヌーズレン機器開発に関する論文が存在した。また，「海外施設の視察報告」として，フランスの高齢者施設におけるスヌーズレン（嶺，2018c）[39]，オーストラリアの特別支援学校におけるスヌーズレンの取り組み（姉崎，2018）[3] の他，オランダ・デンマーク，イスラエル，ドイツの施設視察報告や研究者の講座に出席した報告が見られた。

オランダ・デンマークを視察した大崎（2014）[10] は視察を通して，日本におけるスヌーズレンは暗い部屋の中で特有の機器を使用した活動を指すことが多いが，これは極めて限定的な取り組みであることを指摘している。また，特別支援学校では，どのような感覚を用いて外界を知覚・認知するのが感覚の活用についての評価基準が明確にされ，スヌーズレン活用において評価基準が明確にされていることを報告している。

４．７　我が国におけるスヌーズレン研究の課題および考察

以上の先行研究から，我が国のスヌーズレン研究における５つの課題が浮かび上がってきた。

１つめは，先行研究において，利用者・介助者・環境設定という三項関係を基本とした「スヌーズレン」の活動，人的環境も含めた環境設定を指し示す「MSE」，そして空間のみを指す用語である「Multi Sensory Room」や「Sensory Room」が混同されている点である。現場のスヌーズレン実践報告においては，内藤（2014）北畑（2014）らも述べているように「児童の発達・ニーズに応じた環境設定」が必要であることが浸透していることが報告から感じられたが，文献研究や実験研究ではスヌーズレンのアプローチにおいて，「児童の発達・ニーズに応じて光や音などの刺激をコントロールすること」が前提となっていないものが多く見受けられた。

例えば，大野呂ら（2017）は，発達障害児を対象としたスヌーズレンの研究動向について述べる中で，「スヌーズレンは，光，音，振動や匂いなどの多感覚環境を提供するものであり，ASDに併存する感覚過敏の状態によっては上記の多感覚環境を受け入れがたいものとして負の効果を及ぼすことも推測される」としている。しかし，本来スヌーズレンにおける環境は，利用者のニーズに合わせ，光の強弱，音，香りなどを提供する必要があり，感覚過敏の児童に対しては，外界の刺激をできるだけ遮断することが重要になってくるのである。大野呂らが述べるような一定の決まった環境は「Sensory Room」であり，「MSE」や「Multi Sensory Room」とはそもそも意味合いが異なると考えられる。

２つめは，１つめの課題とも関連しているが，スヌーズレンの科学的エビデンスの裏付けが非常に困難な点である。スヌーズレンの理念に沿っていえば，スヌーズレンの環境は，会話を例とする認知的な機能を必要としない，誰でも持ち合わせた感覚機能を活用した原始的なコミュニケーションツールであり，その使われ方は利用者の数だけ存在する。また，豊見本（2018）も述べているように，対象の児童や利用者に関わる介助者や授業者も，人的環境としてMSEの一部である。こうした，利用者ごとに合わせた光・音・色・香りなどの多数の感覚刺激に加え，人的環境の関わり方も加わったスヌーズレンという活動を科学的に裏付けていくことは現状不可能に近いと考えられる。

３つめは，我が国における従来のスヌーズレン研究は対象者が限られているという点である。大野呂ら（2017）が報告しているように，スヌーズレンは世界的に見ると，対象者も重度知的障害者にとどまらず，発達障害児，認知症，病児，乳幼児，妊婦など多岐に渡り研究が行われている。しかし，我が国における実践研究については知的障害児（長井ら，2018）や自閉症児（中村，2014），通級指導が必要な生徒（東ら，2018）への活用を報告するものも存在するが，そのほとんどは重度・重複障害者を対象としたものである。ここには，日本におけるスヌーズレン最初の取り組みとなった島田療育センターが重度知的障害児を対象とした施設であり，その観点から見たスヌーズレンの取り組みが「スヌーズレン」であるという理解に立って普及が行われてきたことにあることが考えられる。このことについては，姉崎（2013）がこれまでに多く論じている。

４つめは，我が国においては利用者の活動量が少ないことを想定して設計されているホワイトルームやブラックルームという環境設定がスヌーズレンの環境設定であるという認識が浸透していることである。もちろん，これらはヨーロッパでも多く普及している環境設定ではあるが，スヌーズレンが様々な対象者に対して治療や教育に活かされている諸外国を概観すると，ホワイトルーム以外の空間が用意されているケースが多数存在する。例えば，スウェーデン・マルメ市にある大型のスヌーズレンセンター「SAFIREN」には，その目的に合わせた多数の環境が存在する。「太陽の部屋」と名付けられた，アクティブに身体を動かすための部屋，「ブラックルーム」と名付けられた，おもに弱視の人が積極的に探索しやすいように構築された部屋，「風の部屋」と名付けられた，風や振動を感じるための部屋などである。（河本，2003）[20] また，オーストラリアにおける特別支援学校では，ASD児やADHD児などの発達障害児を対象として，十分に身体を動かすことで心理的な安定を測る「ディスカバリールーム」と名付けられた部屋が存在していることを姉崎が報告している（姉崎，2018）オランダやデンマーク，イギリスにおいても同様に，その目的に応じて設定された環境の部屋がMSEとして存在していることも筆者は視察を通して多く目のあたりにしている。（※注　スウェーデン・スヌーズレンセンター「SAIFIREN」（2010，2012）オランダ・乳幼児デイケア施設「ZigZag」（2011），統合保育園「stingsgarden forskola」（2012），イギリス・子育て支援施設「One O’clock center」「NCDA」（2012），フィンランド・親子向けレジャー施設「Murulandia」）（2014）他）

このように，「利用者のニーズに合わせた感覚刺激を調整する」という，スヌーズレンの活動において非常に重要な点が浸透していないことや，ホワイトルームやブラックルームという特定の環境設定のみが普及していることが，我が国におけるスヌーズレン研究が質・量ともに限られたものにしてきた可能性がある。

治療や教育の現場において，MSEを調整することがいかに重要であるかは，例をあげるとわかりやすい。例えば，戦争を体験している認知症の老人であれば，既存の国内のスヌーズレンルームではよく使われているミラーボールの光刺激を提供するとフラッシュバックを起こす可能性がある。暴力などの虐待を受けた児童であれば，プロジェクターで赤いオイル円盤を見れば，そこから血を連想してしまう可能性もある。ネガティブな記憶と紐づくような刺激を提供すれば，それは治療においては逆効果となってしまう。さらに人的な環境という点から言えば，利用者をリラックスに導く場合は介助者もリラックスを促す働きかけを行い，活動的な状態に導きたい場合は，介助者も活動的になるよう働きかけを行うという，目的に応じた関わり方が必要になってくるのである。

最後に５つめとして，研究者と現場実践者の共同研究がほとんど行われていないことを挙げたい。

藤澤・姉崎（2016）による研究など，現場実践者と研究者の共同研究はいくつか見られたが，その数はごく少数であった。１つめに挙げた課題でも触れた通り，現場実践者の多くはスヌーズレンに対する正しい理解がなされていることがうかがえたが，実験研究においてはスヌーズレンのコンセプトやMSEを正しく理解していないと思われる研究が散見された。その原因の１つには，同じ目標に対して現場実践者と研究者の協働がなされていないことにあるのではないだろうか。

スヌーズレンの活動において最も重要とされるのは，その目的が余暇活動であれ，教育や治療であれ，対象者がより幸福な状態へと進むことである。また，今後治療や教育の現場へと普及していくことは非常に期待される点ではあるが，日本は韓国とは異なり，スヌーズレンは余暇活動として長く普及してきた歴史的背景がある。姉崎（2015a）が述べるように，スヌーズレンの発展や質の高い実践普及のために十分な研修は欠かすことができないが，日本では現在すでに「スヌーズレンルーム」という環境そのものによって恩恵を受けている対象者がいること，リラックスのための時間を持っている利用者がいることも事実である。今後の研究においてはこうした点を考慮する必要があると考える。

上記のような課題が考えられることから，今後我が国のスヌーズレン研究においては，「スヌーズレン」という取り組みと，その取り組みを行う環境を指し示す「MSE」「Multi Sensory Room」「Sensory Room」という用語を明確に分けること，多分野の研究者が同じ研究目的に向かい協働研究をしていくことが，スヌーズレン研究の発展に寄与することが示唆された。

文献

（1）東法子・姉崎 弘，児童の気持ちの変容からみるスヌーズレンの授業の教育的意義：小学校の通級指導教室での実践を通して，スヌーズレン教育・福祉研究 = The Japanese journal of education and welfare on snoezelen ISNA日本スヌーズレン総合研究所２，42-51，（2018）

（2）姉崎弘，肢体不自由特別支援学校における重度・重複障害児のスヌーズレンの授業に関する全国調査研究 特殊教育学研究 = The Japanese journal of special education 日本特殊教育学会，56，（5），281-292，（2019）

（3）姉崎弘，オーストラリアの特別ニーズ教育におけるMSE教育の現状と課題：ニューサウスウェールズ州とビクトリア州の実践事例の調査から「スヌーズレン教育福祉研究」2，15-23，（2018）

（4）姉崎弘・藤澤 憲，スヌーズレンの環境調整に関する調査研究：ISNA日本スヌーズレン総合研究所主催のスヌーズレン研修会参加者へのアンケート調査を通して 常葉大学教育学部紀要 = Tokoha University Faculty of Education research review 常葉大学教育学部38，307-314，（2017）

（5）姉崎弘，創始者たちのスヌーズレン思想に関する一考察：最初の著書""Snozelen, another world""を分析対象にスヌーズレン研究 = Practice and research on Snoezelen：実践と研究　国際スヌーズレン協会日本支部全日本スヌーズレン研究会３，1-11，（2015b）

（6）姉崎弘，韓国におけるスヌーズレンの取組みに関する聞き取り調査：わが国の今後の課題を見据えて 大和大学研究紀要 = Journal of Yamato University 大和大学１，23-28，（2015a）

（7）姉崎弘，わが国におけるスヌーズレン教育の導入の意義と展開，特殊教育学研究 = The Japanese journal of special education 日本特殊教育学会51（4），369-379，（2013）

（8）姉崎弘，セラピーとしてのスヌーズレンに関する考察：ドイツ・オランダにおける調査を中心に Snoezelen as the therapy：Focusing on investigation in Germany and Netherlands．姉崎 弘，三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要（31），37-42，（2011）

（9）奥田景太，生活介護でのスヌーズレン活動スヌーズレン

研究 = Practice and research on Snoezelen：実践と研究国際スヌーズレン協会日本支部全日本スヌーズレン研究会 2，28-33，（2014）

（10）大崎博史，特別支援学校等におけるスヌーズレンを活用した環境設定に関する一考察：オランダとデンマークにおける障害のある人が利用するスヌーズレン関連施設の視察を通して，スヌーズレン研究 = Practice and research on Snoezelen：実践と研究　国際スヌーズレン協会日本支部 全日本スヌーズレン研究会 1，22-25，（2014）

（11）大仲麻喜・大﨑淳子・姉崎弘，自閉症児のコミュニケーション力を高めるスヌーズレンの授業 スヌーズレン研究 = Practice and research on Snoezelen：実践と研究国際スヌーズレン協会日本支部全日本スヌーズレン研究 1，35-42，（2013）

（12）大野呂浩志・安田万里子・眞田敏，スヌーズレンの臨床的応用に関する研究動向 ―自閉症スペクトラム障害を中心に―子ども・子育て支援 研究センター年報，広島文化学園 7，5-12，（2017）

（13）小原愛子・後藤彩夏・韓昌完，肢体不自由教育の指導法としてのスヌーズレン教育の可能性と今後の展望：沖縄県におけるスヌーズレン教育の事例分析を中心に，琉球大学教育学部紀要 琉球大学教育学部 86, 129-136，（2015）

（14）加藤直子，お湯ベッドでリラックス：訪問教育の現場からスヌーズレン研究 = Practice and research on Snoezelen：実践と研究　国際スヌーズレン協会日本支部全日本スヌーズレン研究会 1，26-29，（2014）

（15）北川かほる，スヌーズレンが重症心身障害児・者の自律神経機能と自発的行動に及ぼす影響〈学位論文要旨〉広島大学大学院総合科学研究科紀要．I，人間科学研究 広島大学大学院総合科学研究科 9，47-49，（2014）

（16）北川かほる・岩永誠，スヌーズレンが重症心身障害者の自律神経機能に及ぼす影響 日本医学看護学教育学会誌 日本医学看護学教育学会 22，12-18，（2013）

（17）北川桐子，新設重心施設でのスヌーズレン導入について，スヌーズレン研究 = Practice and research on Snoezelen：実践と研究　国際スヌーズレン協会日本支部全日本スヌーズレン研究会 3，32-39，（2016）

（18）北畑智香，放課後等デイサービスでのスヌーズレン活動 スヌーズレン研究 = Practice and research on Snoezelen：実践と研究　国際スヌーズレン協会日本支部全日本スヌーズレン研究会 2，23-27，（2014）

（19）木村牧生，北翔養護学校のスヌーズレンの設備の現況とその活用から　スヌーズレン研究 = Practice and research on Snoezelen：実践と研究　国際スヌーズレン協会日本支部 全日本スヌーズレン研究会 1，13-21，（2013）

（20）河本佳子，「スウェーデンのスヌーズレン」p. 31-49 新評論，（2003）

（21）後藤尚子，スヌーズレンの活用について スヌーズレン研究 = Practice and research on Snoezelen：実践と研究国際スヌーズレン協会日本支部全日本スヌーズレン研究会 2，14-22，（2014）

（22）坂野 純子・澤田 陽一・新山 順子，スヌーズレン空間が発達障害児の自律神経活動に与える効果の予備的検討インターナショナル nursing care research，インターナショナル Nursing Care Research 研究会 12（3），39-44，（2013）

（23）杉原 史高・北野 真奈美，奈良県委託事業「重症心身障害児・者レスパイトケア体制整備事業」におけるスヌーズレンの啓発活動について（報告）：スヌーズレン体験会を通して　スヌーズレン教育・福祉研究 = The Japanese journal of education and welfare on snoezelen ISNA 日本スヌーズレン総合研究所 2，71-75，（2018）

（24）立和名信行・伊東なゆみ・増田 一繁・桑原 遥・高橋 眞琴，児童の実態に応じたスヌーズレン模擬実践の試みスヌーズレン教育・福祉研究 = The Japanese journal of education and welfare on snoezelen ISNA 日本スヌーズレン総合研究所 2，52-61，（2018）

（25）豊見本公彦，「やさしい環境」と「触れ合い」を重視したスヌーズレン教育の実践 スヌーズレン教育・福祉研究 = The Japanese journal of education and welfare on snoezelen ISNA 日本スヌーズレン総合研究所 2，87-92，（2018）

（26）内藤貴司，スヌーズレンを取り入れた療育場面とその効果スヌーズレン研究 = Practice and research on Snoezelen：実践と研究　国際スヌーズレン協会日本支部全日本スヌーズレン研究会 2，2-9，（2014）

（27）中村陽介，スヌーズレンによるS児の変化について スヌーズレン研究 = Practice and research on Snoezelen：実践と研究　国際スヌーズレン協会日本支部全日本スヌーズレン研究会 2，10-13，（2014）

（28）長井恵李・藤澤憲・姉崎弘，簡易式スヌーズレンルームを活用した知的障害児の主体性を高めるスヌーズレンの授業実践 スヌーズレン教育・福祉研究 = The Japanese journal of education and welfare on snoezelen ISNA 日本スヌーズレン総合研究所 2，62-70，（2018）

（29）西木貴美子，親子スヌーズレン体験会によるリラクゼーション効果の検討 スヌーズレン研究 = Practice and research on Snoezelen：実践と研究，国際スヌーズレン協会日本支部全日本スヌーズレン研究会 3，23-25，（2016）

（30）野村寿子，スヌーズレン関連機器紹介（その 3）ボールプール，スヌーズレン研究 = Practice and research on Snoezelen：実践と研究，国際スヌーズレン協会日本支部全日本スヌーズレン研究会 3，45-47，（2016）

(31) 野村寿子，スヌーズレン関連機器紹介（その2）光ファイバー スヌーズレン研究 = Practice and research on Snoezelen：実践と研究，国際スヌーズレン協会日本支部全日本スヌーズレン研究会2，63-65，(2014)

(32) 野村寿子，スヌーズレンの機器解説（その1）バブルチューブ スヌーズレン研究 = Practice and research on Snoezelen：実践と研究　国際スヌーズレン協会日本支部全日本スヌーズレン研究会1，64-66，(2013)

(33) 橋本翠・小西 賢三，Snoezelen（スヌーズレン）環境における認知メカニズムの検討―odd ball課題を用いた心理生理学的研究― 日本心理学会大会発表論文集公益社団法人 日本心理学会82，2EV-050-2EV-050，(2018)

(34) 藤澤 憲・高橋 眞琴，重度・重複障がいのある児童への手作りスヌーズレン空間の活用：「海中の世界」を体験する授業実践を通して 鳴門教育大学授業実践研究：学部・大学院の授業改善をめざして = Naruto University of Education forum for classroom research 鳴門教育大学17，119-128，(2018)

(35) 藤澤 憲・姉崎 弘，重度・重複障害児へのスヌーズレンの授業の工夫：子どもの活動の主体性を育む手作りスヌーズレン環境を目指して　スヌーズレン研究 = Practice and research on Snoezelen：実践と研究 国際スヌーズレン協会日本支部 全日本スヌーズレン研究会3，12-22，(2016)

(36) 星川望，作業療法とスヌーズレン　スヌーズレン研究 = Practice and research on Snoezelen：実践と研究　国際スヌーズレン協会日本支部全日本スヌーズレン研究会2，34-36，(2014)

(37) 間島真紀子・阿部 綾子・佐藤 純子・土井 恵子，O-2-C03重症心身障がい児をもつ母親の心境変化に関する一考察：―児と過ごす空間・時間を提供して―　日本重症心身障害学会誌　日本重症心身障害学会，42（2），209，(2017)．

(38) 眞田敏・安田 万里子・加戸 陽子，認知症の非薬物療法―スヌーズレンを中心とした文献研究―子ども・子育て支援研究センター年報，広島文化学園8，5-15，(2018)

(39) 嶺也守寛，フランスにおける高齢者施設の2事例とスヌーズレンルームの活用状況と評価に関する研究　スヌーズレン教育・福祉研究 = The Japanese journal of education and welfare on snoezelen ISNA日本スヌーズレン総合研究所2，25-34，(2018c)

(40) 嶺也守寛，プロジェクト研究報告 工業技術研究所プロジェクト研究報告 スヌーズレン器材（バブルチューブ）の開発と評価に関する研究　工業技術：東洋大学工業技術研究所報告，東洋大学工業技術研究所40，36-41，(2018b)

(41) 嶺也守寛，スヌーズレン器材（バブルチューブ）の開発と評 価に関する研究　工業技術 = Industrial Technology 東洋大学工業技術研究所40，36-41，(2018a)

(42) 桃井克将，ワーキングメモリに着目したスヌーズレンの意義，スヌーズレン教育・福祉研究 = The Japanese journal of education and welfare on snoezelen ISNA日本スヌーズレン総合研究所2，35-41，(2018)

(43) 柳本雄次，諸外国におけるスヌーズレン研究の現状と課題常葉大学教育学部紀要 = Tokoha University Faculty of Education research review 常葉大学教育学部36，247-254，(2016)

(44) Ad Verheul, ISNA-MSEの発展 2016 ISNA日本スヌーズレン総合研究所（2017）「スヌーズレン教育福祉研究」第1号，9，12，(2017)

(45) International Snoezelen Association, http://www.isna-mse.org/, (2011)

我が国におけるスヌーズレン研究の動向と課題

―― 研究分野によるスヌーズレンに対する認識の差について ――

A Study of the Trend and Problems in Previous Studies on Snoezelen in Japan:

The Differences in Perception of Snoezelen Depending on the Research Fields

橋　本　敦　子*1・加　瀬　　進*2

HASHIMOTO Atsuko and KASE Susumu

特別ニーズ教育分野

Abstract

The purpose of this study was to research the trend and problems in previous studies on Snoezelen in Japan. The findings of this study were as follows:

1. In Japan, Snoezelen which has also aspect of activities is confused with MSE (Multi Sensory Environment) which indicates the environment for Snoezelen. That makes scientific basis be ambiguous.
2. The concept of Snoezelen has not been clarified in Japan, and people recognize that it is an environment only for relaxing.
3. Most of Snoezelen studies in Japan are for people with severely intellectual disabilities.
4. There are few joint research by researchers and practitioners, at present. Their joint research to go towards the same goal will be opening up the possibility of Snoezelen study.
5. It is required to separate Snoezelen, MSE and Sensory Room, clearly, and researches focus on the environment setting, in Japan. Those changes enable to lead the understanding of Snoezelen deepen appropriately, and spread it to fields of education and therapy.

Keywords: Snoezelen, MSE (Multi Sensory Environment), Sensory Room

Department of Special Needs Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨： 本研究の目的は，我が国におけるスヌーズレンに関する研究レビューを行い，その研究動向と課題を明らかにすることであった。結果は以下通りである。

1. スヌーズレンいう取り組みと，その環境設定を指し示すMSE等が混同されており，科学的な裏付けが非常に難しい
2. 我が国におけるスヌーズレン研究のほとんどは，重度知的障害児・者を対象としたものである。
3. 我が国におけるスヌーズレンの環境は，リラックするための環境設定であるという認識が普及している。

---

*1 Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University
*2 Tokyo Gakugei University（4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan）

4. 現在，研究者と実践者による共同研究はほとんどない。同じ目標に向かって進む彼らの共同研究によって，スヌーズレン研究の可能性が拓かれると考えられる。
5. スヌーズレンとMSE，Sensory Roomを明確に分けその環境にフォーカスをすることで，スヌーズレンに対する理解の促進と，MSEが治療や教育の現場に発展していく可能性があることが示唆された。

キーワード: スヌーズレン，MSE（Multi Sensory Environment,）センサリールーム